

朝鮮における「人間と動物の交渉」譚

松原孝俊

一

課せられたテーマについて小見を述べる前に、先ほど御発表になった御二人の高論にコメントを付けることは、朝鮮説話の特色を知っていたら一助になろうし、環日本海地域の地域的特性を浮かび上らせることにもなり、決して無益でないはずである。

まず、第一番目の我が国の山形県新庄市を中心とした「鮭の大助」の伝承についてのお話を拝聴しながら気付いたのだが、管見によれば、朝鮮には、一八八九年から今日に至るまでに刊行された説話集が約三〇〇、説話総数が約二万五千話（曹喜雄による推定）ほどあるにはあるが、鮭の伝承はほとんど知られていない。なるほど『李朝実録』などによれば、咸鏡道や江原道の地方官衙から王室への進上品のリストに、鮭（李朝では鯉魚と書く）の名を見出すばかりでなく、その漁法が「防簾法」であったという。したがって、漁獲高こそ不明であるものの、いわゆる「川の漁業」も盛行したにちがいない。では、なぜ朝鮮説話で鮭を語らないのであろうか。

この疑問に対して、私は未だ名案を得ていない。どうやら、従来の説話採集方法に問題があったことは確かなようだ。つまり、聞き取りの相手として水稻耕作民のみを偏重し、他の生業形態を営む民の存在を忘れた研究者の視点と関心に欠陥があったように思える。あるいは朝鮮で説話採集が開始された時、既に消滅していたのであろうか。

そうしてみると、同じ環日本海文化圏に属する日本が鮭であったのに対し、朝鮮説話中における川（池）の鯉への過剰な関心の向け方は、なぜなのか。興味深い比較材料と言えよう。

さて、次に朝鮮半島北部と隣接する、ソ連のアムール・サハリン地域の異類婚姻譚の御紹介を聞きながら、そこで展開されたジャンル論はともかくとして、東アジアの文化交流史を念頭におけば、今さらながら朝鮮と類似する伝承の多さに驚かされた。しかしながら、両者の間の差異にも当然ながら留意しておく必要がある。というのも、両方の伝承に登場する「虎」の説話上の位置付けに、大きな相違があるからだ。

そこで、本発表では、朝鮮における水と陸の代表的な動物を取り

上げて、それぞれと人間との交渉譚の荒削りなスケッチを述べてみたい。

二

いわゆる朝鮮の「放鯉得宝」譚が、この民族に特有なものでなく、中国の類似伝承と単に偶然な一致としてすませられないほどに緊密な関係にあることは、例えば晋の陶潜の「搜神後記」巻十の説話などを読めば一目瞭然である。おそらく朝鮮の説話宇宙での「鯉」への異常な関心の持ち方には、中国説話からの圧倒的な影響力が参与したにちがいない。偏愛にも近い「鯉」への関心は、その為か、専ら昔話に限定され、他のジャンルにほとんど及ぶことがない。この点は、朝鮮民俗社会における「鯉の伝承」の存在意義を考える上で、キー・ポイントになろう。むしろ、朝鮮の土壤へと中国の「鯉」のフォークロアが移植されたにせよ、朝鮮での土着化は進展するわけで、決して同一なままでありえない。具体的に言えば、天上の仙女とする伝承も唯一例あるにはあるが、むしろ鯉が龍王の子（娘）であるとする伝承が圧倒的に多く、「鯉」と交渉を持った人間の不遇や困苦や病気はたちまち克服・解決されてしまう。李朝民画で著明な絵柄の「躍鯉図」——鯉が如意珠に向かって躍び上がる光景——が人々に好まれ、幸福のシンボルとして重宝されたのも、すべてこうした鯉の持つ「富の授与」者的性格に起因するはずだ。だからこそ、魚重翼を始祖とする忠州魚氏の得姓伝説に鯉の大活躍というプロットが採用されたにちがいない。こう見てくると、時代が下

り、伝承の意味合いがどう変化しようとも、本来は他界（水界＝龍王の国）の存在である鯉を、「富と幸福の所有者」であるとする考え方が、伝承の核にあることは確実である。それ故に、鯉の危機を救助した者は必ず、反対給付として現世（陸界）で望めぬ大量の富を他界から贈与されるのだ。

このような昔話というメディアでの「鯉の伝承」は、ともすると儒教倫理体系の枠組みを強化する単なる教訓譚に墮しがちであるものの、物語られるメッセージは朝鮮民俗社会の世界観の仕組みを教えるものであるまいか。換言すれば、龍王の子であるが故に、鯉を殺害したり虐待したりすれば、その共同体に災害や不幸を将来させるといふ説明体系を物語るものであったと考えるべきであろう。

三

次に我々の視点を「川」から「山」へ移動させる時に、虎がいくつかのジャンルを飛びこえた民俗宇宙での人気者であることに気がくだらう。

まず、「三国遺事」などに収録された檀君神話の中で、周知のように虎は重要な神話的存在として登場する。そこでは熊と一對となつて常に活動するが、最後は人間との異類婚姻に失敗し、熊の勝利に終わる。興味深いのは、これまで全く論じられることのなかった、説話中の、一對となる動物の組み合わせである。ここで他のジャンルにも視野を拡大して、虎と一對となる動物を捜せば、熊の他に「兎・犬」があるものの、「虎と熊」の組み合わせは神話以外のジャ

ンルで成立していない。今、思いつくままに他の動物の組み合わせを列挙してみても、例えば、獅子と兎、蟻と兎、亀と兎などを知る我々には、こうした観点の導入は、ジャンル論に一つの材料を提供するかもしれない。

なお、神話のみならず広く民俗宇宙で認められる、虎を「山神」とする朝鮮の民俗的世界観が、中国の類似信仰と無縁に形成された、と考えてはなるまい。

さて、伝説・昔話というジャンルの虎は、報恩譚や孝行譚の主役である。そのヴァリエーションの多さに驚くほどだ。いずれの報恩の契機ともなるのが、朝鮮の事例では虎の口に刺さった「かんどし」なのに対し、北のアムール河地域の類似伝承では「棘」のようである。鋭く尖った二つ物は、はたして偶然の結果と考えるべきか。その当否はさておき、虎の報恩譚にせよ、虎を感動させた孝行譚にせよ、その結果においては虎の援助で、人間が財宝と権力を獲得する。お金や金塊であったり、高官のポストであったりして、具体的な富の中身は異なるが、虎はそうした富や出世のキッカケとなる幸運を与えてくれるのである。

ここで忘れてならないのは、伝説や昔話というジャンルの中の虎は、人間との間の異類婚姻に成功していることである。神話レベルでの失敗と大きな相異である。無名氏の手になる虎との異類婚姻譚には、では、どのような概念装置が組み込んであるのだろうか。まず伝承を通して誰がメッセージの送り手であろうか。異類（虎）なのか、男なのか、父母なのか、それとも村落共同体の第三者なのか、を吟味して見る必要がある。この問いは、どうやら難解でな

さそうだ。いずれの伝承とも、これを必要とした語り手は村落共同体の第三者であるにちがいない。なぜなら、一つの村落で急激に富を蓄積し、あるいは高位の官職へと栄達した隣家の理由付けに、本来この説話が利用されていたと考えられるからである。小松和彦が指摘するように、いわば、「しるし付きの隣人」を作り上げること、閉じられた村落共同体で突発的に生じた異常現象に、首尾一貫した説明を付け、再び共同体内の秩序を維持したのではあるまいか。その説明譚は、変身モチーフに親和性を持つ宗教的職業者（巫覡）の関与なしには、とうてい完成できなかったであろう。

ところがもと村落共同体単位での、せいぜい数百人の中でのスキヤングラスな出来事だった隣人への好奇心が、口頭伝承といったメディアの空間の中で、何千人何万人もの人との共通のものになっていったであろう。いわば「メディアの中の隣人」化し、噂と評判が四方八方に拡散することになる。但し、スープに水を増せば増すほど、その味が薄くなるように、メディアに乗った「虎との異類婚姻譚」は改変・換骨奪胎をくり返したにちがいない。真の説話と似て非なるものとなりながらも、「メディアの中の共通の隣人」は、さらにメディアの中で増幅されたであろう。説話を聞く人々は、その一瞬、お互いの顔は見えないまま、成り上り者の「共通の隣人」に好奇心を抱いたり嫉妬するのである。話自体は一見してゲロテスクで、動物と人間の境界を飛びこえたタブーの侵犯をし、しかも社会的秩序の乱れを語っている。説話に登場する人物が、仮に現実身近に住む隣人だった場合、あのような異類婚姻譚が広く語られるだろうか、全く疑問である。時代を超え、場所を異にし、無名性

を帯びたが故に、「メディアの中の隣人」譚は語り伝えられたにちがいない。そして、「メディアの中の隣人」に人々が抱く関心は、説話的興味もあつたろうが、むしろ現実に見えぬ富への願望と人々の日常空間の中の不安ではなかつたろうか。

ところで、虎は笑話の有名人でもある。獐猛で、人を食う習性を持つ恐怖の対象でありながらも、朝鮮の笑話の世界では、虎は最も愚かで、ユーモラスな所作をする動物として描かれる。いわば、ピエロが演ずる役割を、虎が代役しているかのように、戯画的に擬人化された形で、登場する。一説には、日本統治期に朝鮮半島の虎が全滅したというが、それ以前には現実社会において、可視できる最も恐ろしい猛獣であつたと言つてよい。恐怖・憎悪の対象である虎が、説話の宇宙で嘲笑・侮蔑の相手へと一八〇度転回する。この変り身の早さこそ、口頭伝承というメディアの専売特許なのかもしれない。無害化した虎を人々は笑話の中でだけ思いきりこけにして、現実から逃避するのである。

四

今日だけが情報化社会でありえない。通信衛星やケーブルテレビこそないものの、いつの時代も口コミで、また画像で情報が伝達されていった。朝鮮社会にあつても、口頭伝承というメディアの中で、「人間と動物の交渉」譚が数多く物語られてきた。これとてその時代の高度情報化システムを利用したものであつた。

そうした朝鮮の民俗宇宙にあつて、「人間と動物の交渉譚」にい

かなる意味と価値が盛り込まれているか。本発表では、この問いを考へる上で、いわばピンスポットに照らし出された「メディアの中の隣人」を説話の中から読み取る作業にも努めた。こうした「メディア論」からの分析が、今後の説話研究にいかなる貢献をするかは全くの未知数であるとは言え、我々はもう少し「知の枠組み」を拡大しても良いのであるまいか。

いくつの未熟な仮説を提出したが、議論の材料として頂きたく思ふと同時に、今後の御教示を得られれば望外の幸いである。

【参考文献】

- 小松和彦 一九八七、『説話の宇宙』人文書院
崔 仁鶴 一九七六、『韓国昔話の研究』弘文堂
孫 東仁 一九八二、『韓国伝来童話の作中事件攷(Ⅷ)』——特

に虎の事件を通じた性格分析を中心として』『仁川教育大学論文集』第十六集第二号 [韓国語]

(まつばら・たかとし／神田外国語大学)